

事業報告書

(平成22事業年度)

独立行政法人工業所有権情報・研修館

目 次

1. 国民の皆様へ
2. 基本情報
 - (1) 法人の概要
 - (2) 事務所及び地方閲覧室の所在地
 - (3) 資本金の状況
 - (4) 役員の状況
 - (5) 常勤職員の状況
3. 簡潔に要約された財務諸表
4. 財務情報
 - (1) 財務諸表の概況
 - (2) 予算・決算の概況
 - (3) 経費削減及び効率化目標との関係
5. 事業の説明
 - (1) 財源構造
 - (2) 財務データ及び業務実績報告書と関連付けた事業説明

1. 国民の皆様へ

我が国が持続的な経済成長を実現するためには、知的財産の創造、保護、活用が好循環を生み出す「知的創造サイクル」を活性化させることが極めて重要であります。このような中で、知的財産創造活動を進めて行く上で得られた成果の保護及び利用を促進する工業所有権制度の役割は一層大きなものとなっております。

工業所有権情報・研修館では、工業所有権制度を支える「情報」及び「人材」という基盤とこれらが活用される「環境」の整備・強化を目的として、特許庁と連携しつつ、公報等閲覧、特許流通促進、情報普及、相談、情報システム整備、人材育成といった各般の業務を効率的かつ迅速・的確に実施しております。

工業所有権情報・研修館では、ユーザーの皆様と同一の視点に立ち、独立行政法人の持つ機動性・柔軟性を十分に活かしながら、知的財産の創造及び活用を支援することにより、知的財産戦略推進の一翼を担う者として尽力して参ります。

2. 基本情報

(1)法人の概要

①事業目的

発明、実用新案、意匠及び商標に関する公報、審査及び審判に関する文献その他の工業所有権に関する情報の収集、整理及び提供を行うとともに、特許庁の職員その他の工業所有権に関する業務に従事する者に対する研修を行うこと等により、工業所有権の保護及び利用の促進を図る。

(独立行政法人工業所有権情報・研修館法第3条)

②沿革

特許庁の施設等機関として各種情報提供業務等を行ってきた工業所有権総合情報館を、平成13年4月1日、公務員型の独立行政法人へ移行。

平成16年10月1日より、これまでの業務に情報普及業務、人材育成業務を追加し、名称も工業所有権情報・研修館と変更。

第1期中期目標期間(平成13～17年度)終了時の組織・業務の見直し(平成17年12月行政改革推進本部決定)により、第2期中期目標期間開始(平成18年4月)から非公務員型の独立行政法人へ移行。

さらに、平成19年1月に特許庁より情報システム関連等の業務(34名)を移管。

③設立根拠法

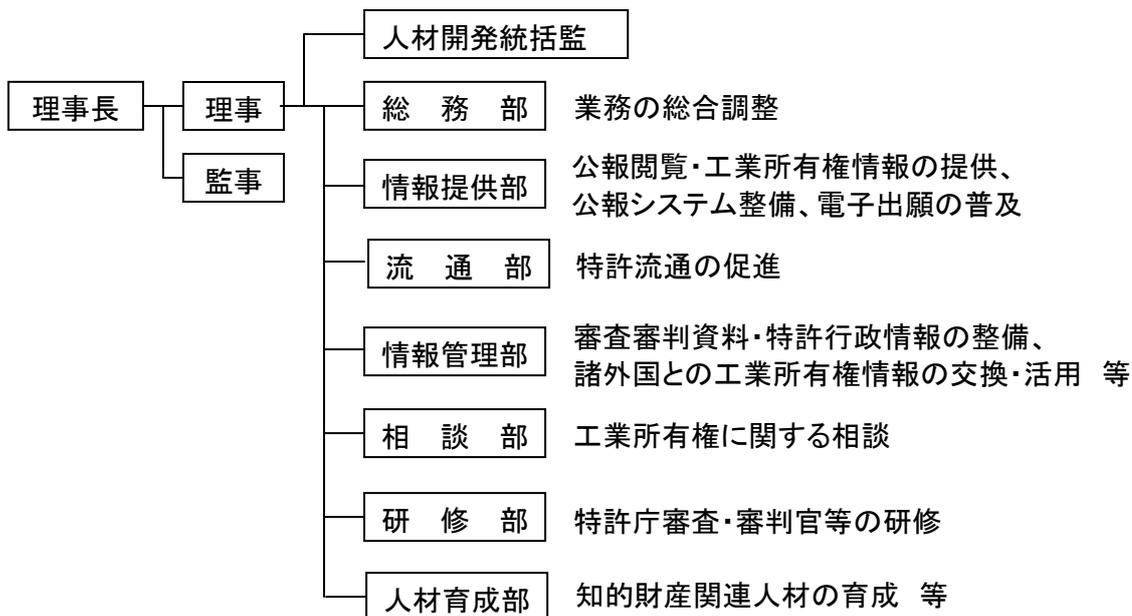
○独立行政法人通則法(平成11年法律第103号)

○独立行政法人工業所有権情報・研修館法(平成11年法律第201号)

④主務大臣(主務省所管課等)

経済産業大臣(経済産業省特許庁総務部総務課)

⑤組織図



(2)事務所及び地方閲覧室の所在地

- ①事務所(本部) 東京都千代田区霞が関3-4-3 特許庁庁舎2F
- ②事務所(別館) 東京都千代田区霞が関1-3-1 経済産業省別館
- ③札幌閲覧室 札幌市北区北7条西4 新北海道ビルディング11F
- ④仙台閲覧室 仙台市青葉区本町3-4-18 太陽生命仙台北町ビル7F
- ⑤名古屋閲覧室 名古屋市中区栄2-10-19 名古屋商工会議所ビルB2F
- ⑥大阪閲覧室 大阪市天王寺区人町2-7 関西特許情報センター1F
- ⑦高松閲覧室 高松市林町2217-15 香川産業頭脳化センタービル2F
- ⑧福岡閲覧室 福岡市博多区博多駅東2-6-23 博多駅前第2ビル2F
- ⑨那覇閲覧室 那覇市おもろまち4-17-9 TNビル3F

※各地方閲覧室(③～⑨)については、平成22年度末までに閉室となっている。

(3)資本金の状況(出資金額、前期末比増減)

資本金

なし

運営費交付金

特許特別会計からの交付金であり、平成22年度の交付額は12,786,540千円である。

(4)役員 の 状 況

役員	氏名	任期	経歴
理事長	清水 勇	自 平成21年 4月 1日 至 平成23年 3月31日 (再任)	平成13年 5月 理工学振興会専務理事 平成16年11月 独立行政法人工業所有権情報・ 研修館理事長
理事	門平 輝彦	自 平成21年 4月 1日 至 平成23年 3月31日 (再任)	昭和41年 4月 特許庁 平成15年 4月 (財)工業所有権協力センター 総務部次長 平成17年 5月 同 財務部長 平成19年 4月 独立行政法人工業所有権情報・ 研修館理事
監事 (非常勤)	田中 昌利	自 平成22年10月 1日 至 平成23年 3月31日	平成18年 4月 長島・大野・常松法律事務所 (現職) 平成22年10月 独立行政法人工業所有権情報・ 研修館監事
監事 (非常勤)	原田 忠昭	自 平成21年 4月 1日 至 平成23年 3月31日 (再任)	平成15年 7月 公認会計士税理士原田忠昭事 務所所長(現職) 平成19年 8月 独立行政法人工業所有権情報・ 研修館監事

(5)常勤職員 の 状 況

平成22年度末において、常勤職員は97人(前年同期比3人減、3%減)、平均年齢は47.3歳(前年同期47.3歳)となっており、全職員が国からの出向者である。

3. 簡潔に要約された財務諸表

①貸借対照表

(単位:円)

資産の部	金額	負債の部	金額
流動資産		流動負債	
現金・預金	10,693,933,194	未払金	3,182,954,313
その他	642,337	その他	52,455,753
固定資産		固定負債	
有形固定資産	27,650,951	資産見返運営費交付金	1,313,796,385
無形固定資産	1,318,542,437	負債合計	4,549,206,451
		純資産の部	
		資本剰余金	1,020,600
		利益剰余金	7,490,541,868
		純資産合計	7,491,562,468
資産合計	12,040,768,919	負債純資産合計	12,040,768,919

(注)重要な無形固定資産

特実公報システム(19年度)	77,833,270円
〃 (20年度)	69,758,491円
〃 (21年度)	33,707,514円
〃 (22年度)	46,545,146円
意商審公報システム(19年度)	8,375,993円
〃 (20年度)	10,108,535円
〃 (21年度)	27,994,963円
〃 (22年度)	22,183,097円
パソコン電子出願共通ソフトウェア(19年度)	170,021,232円
〃 (20年度)	252,658,394円
〃 (21年度)	286,032,600円
〃 (22年度)	278,614,446円
包袋管理チェックプログラム(21年度)	13,187,591円
〃 (22年度)	16,730,960円

②損益計算書

(単位:円)

	金額
経常費用(A)	11,344,154,992
業務費	11,084,613,315
人件費	1,123,836,964
減価償却費	348,542,196
その他	9,612,234,155
一般管理費	259,541,677
人件費	203,851,093
減価償却費	3,394,950
その他	52,295,634
経常収益(B)	18,803,257,541
運営費交付金収益	18,378,554,613
自己収入	78,634,610
その他	346,068,318
その他調整額(C)	0
当期総利益(B-A+C)	7,459,102,549

③キャッシュ・フロー計算書

(単位:円)

	金額
I 業務活動によるキャッシュ・フロー(A)	2,213,050,256
原材料、商品またはサービスの購入による支出	△9,170,084,024
人件費支出	△1,329,879,259
その他業務支出	△151,028,675
運営費交付金収入	12,786,540,000
自己収入	77,502,202
その他収入	12
II 投資活動によるキャッシュ・フロー(B)	△459,385,714
III 財務活動によるキャッシュ・フロー(C)	0
IV 資金にかかる換算差額(D)	0
V 資金増加額(又は減少額)(E=A+B+C+D)	1,753,664,542
VI 資金期首残高(F)	8,940,268,652
VII 資金期末残高(G=F+E)	10,693,933,194

④行政サービス実施コスト計算書

(単位:円)

	金額
I 業務費用	11,265,511,617
損益計算書上の費用 (控除)自己収入等	11,344,154,992 △78,643,375
(その他の行政サービス実施コスト)	
II 損益外減価償却相当額	—
III 損益外減損損失相当額	—
IV 引当外賞与見積額	△4,726,589
V 引当外退職給付増加見積額	△30,461,286
VI 機会費用	191,758,641
VII (控除)法人税等及び国庫納付額	—
VIII 行政サービス実施コスト	11,422,082,383

■ 財務諸表の科目

①貸借対照表

現金・預金等

現金及び預金

有形固定資産

建物附属設備、機器備品など独立行政法人が長期にわたって使用または利用する有形の固定資産

無形固定資産

有形固定資産以外の長期資産で、ソフトウェア、電話加入権など具体的な形態を持たない無形の固定資産

未払金

独立行政法人の通常の業務活動において発生した未払金

資金見返運営費交付金

固定資産の取得に伴う運営費交付金債務からの振替額

資本剰余金

国から引き継いだ資産及び独立行政法人が取得した資産で独立行政法人の財産的基礎を構成するもの

利益剰余金

独立行政法人の業務に関連して発生した剰余金の累計額

②損益計算書

業務費

独立行政法人の業務に要した費用

人件費

給与、賞与、法定福利費等、独立行政法人の職員等に要する経費

減価償却費

業務に要する固定資産の取得原価をその耐用年数にわたって費用として配分する経費

運営費交付金収益

国からの運営費交付金のうち、当期の収益として認識した収益

自己収入等

手数料収入、研修受講料収入などの収益

③キャッシュ・フロー計算書

業務活動によるキャッシュ・フロー

独立行政法人の通常の業務の実施に係る資金の状態を表し、原材料、商品又はサービスの購入による支出、人件費支出等が該当

投資活動によるキャッシュ・フロー

将来に向けた運営基盤の確立のために行われる投資活動に係る資金の状態を表し、固定資産の取得による支出が該当

④行政サービス実施コスト計算書

業務費用

独立行政法人が実施する行政サービスのコストのうち、独立行政法人の損益計算書に計上される費用

その他の行政サービス実施コスト

独立行政法人の損益計算書に計上されないが、行政サービスの実施に費やされたと認められるコスト

引当外賞与見積額

財源措置が運営費交付金により行われることが明らかな場合の賞与引当金見積額(損益計算書には計上していないが、仮に引き当てた場合に計上したであろう賞与引当金見積額を貸借対照表に注記している)

引当外退職給付増加見積額

財源措置が運営費交付金により行われることが明らかな場合の退職給付引当金増加見積額(損益計算書には計上していないが、仮に引き当てた場合に計上したであろう退職給付引当金見積額を貸借対照表に注記している)

機会費用

国又は地方公共団体の財産を無償又は減額された使用料により賃貸した場合の本来負担すべき金額などが該当

4. 財務情報

(1) 財務諸表の概況

① 経常費用、経常収益、当期総損益、資産、負債、キャッシュ・フローなどの主要な財務データの経年比較・分析(内容・増減理由)

(経常費用)

平成22年度の経常費用は11,344,154,992円と、前年度比66,974,135円増(0.6%増)となっている。これは、固定資産(ソフトウェア)取得における減価償却費が増大したこと等が主な要因である。

(経常収益)

平成22年度の経常収益は18,803,257,541円と、前年度比7,521,705,192円増(66.7%増)となっている。これは、中期目標期間の最終年度であることから、独立行政法人会計基準第81条第3項の規定に基づき、運営費交付金債務残高の全額を収益化したことが主な要因である。

(当期総損益)

平成22年度の当期総利益は7,459,102,549円と、前年度比7,454,731,057円増となっている。

(資産)

平成22年度末現在の資産合計は12,040,768,919円と、前年度末比1,768,424,330円増となっている。これは、競争入札及び企画競争調達や事業の見直し等による業務経費の節減等により運営費交付金に残余が生じ現金及び預金が増加(1,753,664,542円増)したことが主な要因である。

(負債)

平成22年度末現在の負債合計は4,549,206,451円と、前年度末比5,690,678,219円減となっている。これは、中期目標期間の最終年度であることから、独立行政法人会計基準第81条第3項の規定に基づき、運営費交付金債務残高の全額を収益化したことが主な要因である。

(業務活動によるキャッシュ・フロー)

平成22年度の業務活動によるキャッシュ・フローは2,213,050,256円と、前年度比460,165,614円減となっている。これは、運営費交付金収入が減少(462,304,000円減)したことが主な要因である。

(投資活動によるキャッシュ・フロー)

平成22年度の投資活動によるキャッシュ・フローは△459,385,714円と、前年度比77,308,469円減となっている。これは、固定資産(ソフトウェア)の取得による支出が減少したことが主な要因である。

表 主要な財務データの経年比較

(単位:百万円)端数は四捨五入

区分	18年	19年	20年	21年	22年
経常費用	11,872	12,202	11,658	11,277	11,344
経常収益	11,875	12,209	11,675	11,282	18,803
当期総利益	4	7	16	4	7,459
資産	5,760	6,595	7,928	10,272	12,041
負債	5,756	6,583	7,900	10,240	4,549
利益剰余金(又は繰越欠損金)	4	11	27	31	7,491
業務活動によるキャッシュ・フロー	△557	495	1,398	2,673	2,213
投資活動によるキャッシュ・フロー	△9	△318	△507	△537	△459
財務活動によるキャッシュ・フロー	△0	△0	0	0	0
資金期末残高	5,736	5,913	6,804	8,940	10,694

②行政サービス実施コスト計算書の経年比較・分析(内容・増減理由)

平成22年度の行政サービス実施コストは11,422,082,383円と、前年度比65,547,604円増(0.6%増)となっている。これは、ソフトウェアにおける減価償却費が増大したこと等が主な要因である。

表 行政サービス実施コストの経年比較

(単位:百万円)端数は四捨五入

区分	18年	19年	20年	21年	22年
業務費用	11,773	12,113	11,575	11,169	11,266
うち損益計算書上の費用	11,872	12,202	11,658	11,277	11,344
うち自己収入	△99	△89	△83	△109	△79
損益外減価償却累計額	—	—	—	—	—
損益外減損損失相当額	1	—	—	—	—
引当外賞与見積額	—	△3	△4	△8	△5
引当外退職給付増加見積額	12	△58	△123	△2	△30
機会費用	147	158	187	198	192
行政サービス実施コスト	11,932	12,210	11,635	11,357	11,422

(2) 予算・決算の概況

(単位: 百万円) 端数は四捨五入

区分	17年		18年		19年	
	予算	決算	予算	決算	予算	決算
収入						
運営費交付金	12,915	12,915	12,773	12,773	14,232	14,232
その他	159	51	80	99	80	89
支出						
業務経費	12,008	11,555	11,704	10,762	12,880	11,515
一般管理費	216	178	440	400	455	419
人件費	850	802	708	711	977	928
区分	20年		21年		22年	
	予算	決算	予算	決算	予算	決算
収入						
運営費交付金	13,659	13,659	13,249	13,249	12,787	12,787
その他	81	83	81	109	101	79
支出						
業務経費	12,327	10,885	11,939	10,306	11,516	10,211
一般管理費	443	368	430	361	420	340
人件費	970	846	961	819	953	813

(3) 経費削減及び効率化目標との関係

当法人においては、一般管理費について期間中、前年度比3%以上の効率化を行うとともに、業務経費について期間中平均で、前年度比4%程度の効率化を行うことを目標としている。

この目標を達成するため、競争入札等による削減等の措置を講じているところである。

(単位: 千円) 端数は四捨五入

区分	前中期目標期間終了年度		当期中期目標期間					
	17年度 予算金額	比率	18年度予算	19年度予算	20年度予算	21年度予算	22年度予算	
			金額	金額	金額	金額	金額	比率
業務経費	12,008,303	100%	11,704,175	12,879,623	12,327,194	11,938,551	11,515,600	96.46%
一般管理費	215,604	100%	222,800	231,952	220,967	210,595	201,986	95.91%

※ 18, 19, 20, 21, 22年度の一般管理費予算額は、管理部門の人件費を除いた額

※ 18, 19年度の予算額は、平成19年1月に特許庁から情報システム関連等の業務が移管された事により増加

5. 事業の説明

(1) 財源構造

当法人の経常収益は18,803,257,541円で、その内訳は、運営費交付金収益18,378,554,613円(収益の97.7%)、複写手数料収入3,869,610円(0.1%)、研修受講料収入74,765,000円(0.4%)、その他346,068,318円(1.8%)となっている。

(2) 財務データ及び業務実績報告書と関連付けた事業説明

ア 工業所有権関係公報等閲覧業務

(独立行政法人工業所有権情報・研修館法(以下「法」という。)第11条第1号業務)

我が国の特許公報等及び外国公報等を収集し、一般の閲覧に供している。

本館では、特許審査官端末及びCD/DVD公報閲覧用機器等により電子媒体の特許公報等を閲覧に供するほか、紙媒体の特許公報等も閲覧に供している。

経済産業局特許室に隣接した各地の閲覧室(全国7箇所)においても電子媒体の特許公報等の閲覧及びこれら閲覧に関する相談・支援を行っている。

22年度の主な業務実績は以下のとおり。

閲覧利用者数 20,594人

閲覧機能の改善等、利用環境の向上及び設置台数の見直し 等

業務の財源は、工業所有権関係公報等閲覧業務関係費として、運営費交付金(平成22年度357,921,795円)及び複写手数料収入(平成22年度71,598円)からなっている。

イ 審査審判関係図書等整備業務(法第11条2号)

特許庁の審査・審判業務に必要な図書及び技術文献等を収集し、特許庁に提供するとともに一般の閲覧に供している。

また、審査・審判の最終処分(特許・登録・拒絶等)が確定した出願書類及び審判記録を特許庁から受け入れ、出納及び保管等の管理業務を行っている。

22年度の主な業務実績は以下のとおり。

内国:図書479冊、雑誌9,917冊(399タイトル)

外国:図書 40冊、雑誌 5,966冊(401タイトル)

非特許文献:3,174冊(144タイトル)

意匠カタログ:内国12,007件、外国3,000件

INPITのホームページにて閲覧可能な図書リストの作成、更新を行い閲覧サービスの充実を図る 等

業務の財源は、審査・審判関係図書等整備業務関係経費として、運営費交付金(平成22年度240,060,838円)及び複写手数料収入(平成22年度48,021

円)からなっている。

ウ 工業所有権情報流通等業務(法第11条3号)

知的創造サイクルの重要な要素である「特許の活用」を促進する観点から、開放特許が中小・ベンチャー企業等において有効に活用されるよう円滑な情報提供を行うとともに、特許流通に係る専門人材の育成を促進することにより、開放特許の流通等が民間や地方公共団体等の関係者間で自立的に行われ、特許流通市場を発展させるため環境整備等を行っている。

22年度の主な業務実績は以下のとおり。

特許流通アドバイザー派遣:83名、企業訪問回数20,166回

特許流通アドバイザーによる成約件数:1,272件(22年度末累計:14,699件)

特許流通データベース新規登録件数:5,462件(22年度末累計:43,593件)

特許情報活用支援アドバイザー派遣:52名、企業訪問回数10,849件 等

業務の財源は、工業所有権情報流通等業務関係経費として、運営費交付金(平成22年度2,149,458,477円)及び複写手数料収入(平成22年度429,977円)からなっている。

エ 工業所有権情報普及業務(法第11条4号)

特許庁が保有する工業所有権情報の普及と利用促進を図るべく、特許電子図書館を拡充するとともに、外部への提供データを整備している。また、他国の工業所有権庁と工業所有権情報の交換を行っている。

22年度の主な業務実績は以下とおり。

工業所有権情報の提供(IPDL)検索回数:86,001,923回

整理標準化データ提供 提供件数:14,129,047件

他国との工業所有権情報交換 和文抄録作成:313,442件

英文抄録作成:288,447件

特許漢字書誌データ:550,255件

特許連想検索試験システムの実証試験 等

業務の財源は、工業所有権情報普及業務関係経費として、運営費交付金(平成22年度6,189,256,757円)及び複写手数料収入(平成22年度1,238,099円)からなっている。

オ 工業所有権相談等業務(法第11条5号)

相談窓口を常設し、特許、実用新案、意匠及び商標等の出願手続き等、工業所有権に関する一般的な相談に応じるとともに、併せて文書、電話、電子メール、FAXによる相談対応を行っている。

22年度の主な業務実績は以下のとおり。

相談件数:45,805件

商標出願に関する手引き等を作成し配布

ユーザーへの情報提供のため、産業財産権相談サイトの開設 等

業務の財源は、工業所有権情報相談等業務関係経費として、運営費交付金(平成22年度155,981,895円)及び複写手数料収入(平成22年度31,202円)からなっている。

カ 情報システム関連業務(法第11条6号)

電子出願ソフトや公報システム等の整備・管理、その他特許庁の審査・審判業務に必要な資料等の電子データ整備を行う等、情報提供事業等の基盤となる情報システムの整備を行っている。

22年度の主な実績は以下のとおり。

電子出願ソフト利用率:約94%

出願マスタデータの追記・修正データ作成:7,562件

審査・審判資料等の電子データ作成 GENSEQ蓄積:25,864,237件

DNAデータ加工: 5,310件

ユーザーの利便性を考慮したコンテンツの作成 等

業務の財源は、工業所有権情報システム関連業務経費として、運営費交付金平成22年度1,056,192,127円)及び複写手数料収入(平成22年度211,280円)からなっている。

キ 人材育成業務(法第11条7号)

知的財産関連業務を支える人材の育成を図り、特許庁における審査迅速化並びに企業等における知的財産戦略の策定、権利の適切な保護及びその活用等ができる体制の整備に関する支援等を行っている。

22年度の主な実績は以下のとおり。

特許庁職員に対する研修(法定研修含む):6,017名

調査業務実施者の育成研修:392名

民間企業等の人材に対する研修:754名

情報通信技術を活用した学習機会の提供:eラーニング45コンテンツの提供 等

業務の財源は、人材育成業務関係経費として、運営費交付金(平成21年度2,814,000円、平成22年度508,350,321円)、複写手数料収入(平成22年度102,254円)及び研修受講料収入(平成22年度74,765,000円)からなっている。